

堅物エリートは高嶺の秘書を
滾る独占欲で囮い堕とす

シンガポールのマリーナベイエリア。そこに新規オープンしたハイエンドホテル。
「はあ……夢みたい」

私が勝俣陽葉里が勤務するオーケレイホールディングスは、日本国内でテーマパークや映画館、宿泊施設など様々なレジャー施設を運営する企業だ。

そんな我が社が満を持しての海外初進出となるホテルアストラエア。

そのプレオープンに合わせて開催されるレセプションパーティーに参加するため、昨夜遅くに現地入りを果たした私は、今でもまだ信じられなくて部屋を隅々まで見回している。

「こんな豪華な部屋に一人で泊まってるなんて」

昨夜は着くなり眠るだけだったけれど、今朝はビュッフェ形式の朝食をとり、その後は自由時間を満喫して観光を楽しんだ。

仕事の一環だからホテルを利用した感想を報告書にまとめると言っているけれど、今はキングサイズの大きなベッドに寝転んで、非日常を充分に楽しめることに満足してしまう。

豪華な部屋もだけど、なにより大きな窓から見える景色がなんとも贅沢で、これには仕事で来て

いることを忘れててしまうくらいうつとりさせられるものがある。

これもある事業部長のパートナーを引き受けた役得だ。

仮頂面とは言わないけれど、いつも塩対応で滅多に笑顔を見せることがなく、口元を縋^ほばせただけでしばらく周りが大騒ぎになつてしまふ。

黒髪をオールバックにセットして、凛々しい眉の下には力強く印象的な二重の目。スッと通った鼻筋に、ワイルドな色気が匂い立つ少し大きめな口元。

テーラーで仕立てているのだろう、体に合ったスーツを嫌味なく着こなし、艶のある低めの声は少しだけハスキーで印象的だ。

イケメンというよりは、容姿端麗、眉目秀麗なんて堅苦しい表現の方が合っているかもしれない。だからこそ久松^{ひさまつ}事業部長は、遠くから眺める程度がちょうどいい、『観賞用イケメン』なんて言われている。

これはあくまで噂だけど、事業部長が実は超有名な大企業の御曹司だと聞いたことがある。

ミステリアスで私生活の匂いを感じさせない人だからこそ、そんな噂話が囁かかれているんだろう。

うか。

「まあ、落ち着いて品があるとは思うけどさ」

ちなみに私は入社後、ホテル事業部で営業や企画を経て、事業部長の秘書になつて一年になる。そんな私がシンガポールにやつてきたのは、そもそも事業部長に理由があるので。

アストラエアのオープンにあたり、ホテル事業部の責任者として事業部長がレセプションパー

ティーに参加するのだが、彼は独身で同行させるパートナーがいないと言い出した。

別に単身で参加しても問題はないはずだけど、三十四歳にして事業部長を任されるエリートな上に、あの強烈に人の目を引くビジュアルなのだから、参加女性たちが放つてはおかしいだろう。

そこで白羽の矢が立つたのが、彼の秘書である私という訳だ。

そんな私は、今年で二十八歳。

一応ファッショントートに目を通し、年相応に落ち着いた印象を心掛けてはいる。

だけど髪質のせいで暗く見えてしまうダークブラウンの髪に、どこにでもいそうで、よく言えば親近感があると言われる凡庸な顔立ち。

背は高い方で一六五センチあるけれど、ちょっとだけ肉付きが良くて、モデルのようなスレンダーナ体型に憧れる。

そんな私がパートナーだなんて貧乏くじと言えなくもないけれど、視察も兼ねているからと同行を求められ、仕事ならば了承するしかなく今に至る。

「あ、いけない」

ハツとして時間を確認する。

レセプションパートナーは十八時から。そろそろシャワーを浴びてメイクや着替えをすれば、時間的にちょうどいいだろうか。

隣に泊まっている事業部長が、パートナーの二十分前に迎えに来てくれる手^てはすになつてている。今回のパーテイーにはゲスト以外にプレス、それに現地の代表者だけでなく他にも、日本から会

長や社長などの役員が他にも参加する予定だ。

そんな中で秘書なのにパートナーを任せられ、今頃になつて緊張で手が震えてしまう。

「ダメだ。考える時間を作らないようにしよう」

この日のために新調した下着をキャリーケースから取り出すと、バスルームに移動してシャワーを浴びる。

アメニティが充実していて、ゆっくりと湯船にも浸かりたいけれど、それはパーティが終わつてからのんびりと楽しめばいい。

サッと汗を流すように手早くシャワーを済ませ、しつかりとスキンケアをして髪を乾かし、メイクに取りかかる。

いつもは控えめにしているけれど、今日は華やかなパーティーに参加するのだからと、アイラングをしつかりと引いて目尻で少し跳ね上げて目元の印象を変えてみた。

「うん。いい感じ」

そしてある程度マイクを済ませると、何度も練習した通りに動画を見ながら髪をアップスタイルに整える。

バスローブのまま部屋に移動すると、ハンガーにかけておいたドレスを手に取り、急速着替えて背中のジップパーをゆつくりと上げた。

「こんな素敵なドレス、本当に良かったのかな」

出張が決まって割とすぐに、パーティに参加するなら必要だろうと事業部長がこのドレスを一

緒に見繕つてくれた。

支払いを気にする私に、事業部長は必要経費だと言つていたけれど、たつた一度のパーティのためだと思うといたたまれない気持ちになる。

少し悶々としながらもマイクを仕上げ、後れ毛が落ちないようにワックスで髪を整えながら鏡に映る自分を何度も確認した。

「招待客のリスト、もう一度見直しどとかないと」

バスルームと部屋をバタバタと行き来して忙しなく動き回り、キャリーケースから資料を取り出して招待客の情報を整理する。

事前に頭に叩き込んできだし、事業部長が相手なので私のサポートなんか必要ないかも知れない。だけどなにかしていいないと落ち着かない。

香水を手首や首筋につけ、クラッチバッグにリップなどを移し替えながら、ブツブツ呟いて資料と睨めっこする。

そうこうしているうちにあつという間に時間が経ち、来客を知らせるドアチャイムが鳴った。
(やだ、もうそんな時間だったの)

ドアスコープから外を覗くと、事業部長が見える。

「すみません、お待たせしました」

ドアの向こうに現れたモデルのようなタキシード姿に、さすがは『観賞用イケメン』だなんて失礼なことを思つてしまふ。

そんな私の思いを知つてか知らでか、事業部長が僅かに表情を歪めたので、なにか不手際があつただろうかと一気に肝が冷える。

「まだ準備中だつたのか」

「いえ、もう出られます」

「そうなのか？ イヤリングやネックレスを忘れてると思うんだが」

「……あ、ごめんなさい。すぐに支度します」

あれだけ鏡を見て確認したのに、肝心などころで抜けている自分が恥ずかしくなつた。

「申し訳ありません。お待たせしました」

「いいや、構わない。では行こうか」

「はい。お願ひします」

ルームキーを忘れないようにバッグの中に入れ、事業部長にエスコートされて部屋を出る。

こうして並んでみると、一七八センチある私の兄よりも随分と背が高い印象を受ける。顔がいいだけでなくスタイルまでいいなんて、天は二物を与えないんじゃないのか。

余計なことを考えて履き慣れないヒールに意識を取られると、さりげなく体を支えられてそのまま寄り添つてゆつくり歩く形になり、申し訳なさすぎて泣きたくなる。

「すみません……」

「なにがだ」

「こんな調子でパートナーが務まるのかどうか」

「なら力を抜いて、リラックスしろ」

不意に微笑みを向けられ、ほほ初めて見る神対応にギョッとしたつも、そのおかげで緊張なんてどこかに飛んでいつてしまつた。

（なんか意外。優しく笑つたりできるんだ）

心中でそんな失礼なことを考えていると、事業部長はいつものポーカーフェイスに戻つてしまつた。いや、いつも増して厳しい表情だ。いつも冷静沈着で何事にも動じない印象が強いけれど、さすがに今回の一大プロジェクトに関しては、身が引き締まる思いということなんだろうか。

「勝俣さん、今日は秘書の立場を忘れてくれて構わぬいから」

会場に着くと、目線も合わせずに事業部長がそう呟いた。

「どういう意味ですか」

「これは確かに仕事の一環だが、今日はパートナーとしての参加を頼んだんだ。秘書を同行させた訳じやないつてことだよ」

「分かりました。善処します」

パーティーが始まると、事前に招待客の情報を頭に叩き込んでおいたおかげか、事業部長の隣であたふたすることもない。女性だけの世間話も、充分に盛り上げることができたと思う。

ようやく一区切りついて人混みから離れ、食事に手をつける。自分では気づかない間にかなり緊張していたようで、指先が冷たくなつていることにそこで初めて気がついた。

(うつかりお皿を落とさないようにしないと)

ついに震え始めた手を落ちさせ、広いパーティー会場を見回す。

今までも仕事でパーティーに参加したことはあるけれど、これまでには国内でホテル事業部の見知った顔も多かつたし、一社員としての参加だったからこんなにも緊張しなかった。

あまりの緊張に喉の奥が張り付いたように渴いてしまい、勢いよくドリンクを飲み干してそれを誤魔化すと、私の周りが一瞬ザワツとして色めき立つ。

「陽葉里、ここにいたのか」

「……!?」

突然背後から声をかけられただけでもビックリするのに、不意に卜の名前で呼ばれて何事かと目を剥いでしまう。

「驚きすぎだ」

「いや……あの」

「便宜上、そう呼ばないとおかしいだろ」

事業部長が身を屈め、耳元に囁く。

（いや近い。近いですって）

パーティーに参加している女性たちの視線を一身に集めているのに、挙動不審な私とは違つて、いつもの調子でポーカーフェイスな事業部長の心情は読めない。

その上で何事もなかつたように、私の手元からフルーツを摘まんで口に入れると、通りかかつた

ウェイターからグラスを受け取つた。

「キミは少し真面目すぎる嫌いがある。パートナーとしての振る舞いは完璧だが、そのせいでかなり疲れた顔をしてるぞ」

「すみません、顔に出てましたか」

「いや、俺以外にはまず分からぬだろう。これでも一年一緒に働いてきたから、なんとなくそう感じただけだよ」

グラスを掲げて乾杯すると、リラックスしろと言つただろうと事業部長の表情が険しくなつて、小言のように言葉が続く。

「パーティーを楽しめるように、わざわざ距離をとつた意味がないだろ？」

どうりで、途中から仕事に絡んだやり取りが多かつたのは気のせいではなかつたらしい。

仕事の一環で来ているのに、プライベートな会話でゲストをもてなすのは骨が折れた。特に事業部長との関係について色々と詮索されたのは厄介だった。

「お気遣いありがとうございます」

「なんだ。仕事の話に交ざりたかったか」

「どうでしようか。パートナーとして、出しやばる場面ではないとも思いますし」

「そういう気が回るから仕事もしやすいよ」

不意に腰を抱かれて体が近づくと、ふわりと甘くてスパイシーな香りが濃くなり、髪にキスを落とされていよいよ頭がバグりそうになる。

だけど視界に会長ご夫妻の姿が目に入つて、なるほどこれはパフォーマンスなのだと瞬時に理解した。

目の前にいらした会長ご夫妻と会話を弾ませ、ゲストを紹介したいと案内する会長たちを追つて、パーティー会場の中を再び忙しく移動して回った。

◆◆◆

「どうした。疲れたか」

「いえ、大丈夫です」

会場を出て最上階のバーに誘われたのは意外だつた。

だけど蓋を開けてみれば案の定視察のためらしく、さつきからバーのコンセプトについて延々と説明を受けている。

事業部長曰く、プレオープンとはいえ、お客様が入つた様子をきちんと本人の目で確認したかつたのだとか。

(本当に、仕事の鬼だよな)

黙つていれば確かに素敵。だけど口を衝く言葉がかなり辛辣なので、事業部長を見ていると、なにも言われていないのに胃が痛くなつてくる。

それにしても宿泊してる部屋もそうだけど、最上階のバーから眺める景色は極上の夢物語のよう

な景色だ。こんな素敵なかつて夜景を眺めながら、好きな人と過ごせたらロマンチックだと思う。

しかし残念なことに私に恋人なんていないし、隣に座つているのはあの事業部長だ。

「勝俣さんには女性視点の意見を聞きたい」

「そうですね、ロマンチックでとても素敵なかつて空間だと思います。コンセプト通り、若年層に限らず大人の落ち着いた雰囲気をきちんと押さえてると感じます」

「優等生な答えだな」

「すみません。どうもこういうのには疎くて」

「いや、勝俣さんらしいんじやないか」

相変わらずのポーカーフェイスでバーaponを呻^{あお}ると、事業部長の手の中で、グラスの氷がカラランと揺れる。

「そうですよね。私もそう思います」

口に出してから嫌味っぽかつたと思つたけれど、事業部長は気にした様子もなく夜景を眺めている。

(本当なら、恋人と来たかつたんだろうな)

何気なく横顔を見つめてふとそう思うと、どうしてかズキッと胸の奥が痛む。

だけどすぐに我に返つたのは、少し怪訝^{けげん}な顔をして私を見る事業部長と目が合つたからだ。

「どうした。酔つたのか」

「いえ、まさか。意識はハッキリしてます」

「無防備すぎるのも厄介だな」

「……？」

小声で返されて聞き逃してしまった言葉に、無防備と入っていた気がするけれど、そんな訳ないかと手元のグラスを掴んで残りのカクテルを飲み干す。

その後も仕事の話をしながらお酒を楽しみ、これから先、海外での案件が増えていくんだろうと言う事業部長の話に聞き入っていた。

やっぱりこの人は仕事の鬼で、安易にプライベートに立ち入らせる気配がない。

パートナーでは秘書でなくパートナーをと望んだクセに、その時間が過ぎ去つてしまえばいつも通りの塩対応なんだから。

（どうしてかな。なんかモヤモヤする）

自分の中に芽生えた気持ちがなんなか分からず、それを払うために何杯目か分からなくなつたカクテルを一気に飲み干す。

そんな様子に呆れた表情を浮かべた事業部長の手が私の手に重なり、思つていたよりもずっと優しくてあたたかい温もりが伝わってくる。

「そろそろ飲むのはやめておいた方がいい」

「そんなに飲んできませんけど」

「酔つた奴ほどそういうことを言う」

「ですから、酔つてないですって」

「じゃあ酔う前に、もうやめておけ」

子どもをあやすみたいに諭され、不意に甘くてスペイシーな匂いが濃くなつた気がする。重なつた手の甲を指でそつと撫でられて、事業部長の色氣にあてられてしまう。

（なんか……マズいな）

ドキドキともどかしさを抱えながらエスコートされるままバーを出て、エレベーターで宿泊する階まで移動する。

「あのか」

「なんでしようか」

また酔っているとか、飲みすぎだなんて怒られるんだろうか。

「俺は勝俣さんの真面目なところは、悪くないと思つてるよ」

「はあ、ありがとうございます」

「何事に対しても真摯に向き合う姿勢は、いつもいい刺激を与えてくれてるからね」

「どうしたんですか、急に」

「いや、俺はつまらない人間だからね。仕事熱心な勝俣さんに、感謝の言葉をかけたこともなかつたと思ってね」

「感謝だなんて。この一年秘書を務めて、勉強させていただいてるのは私の方です」

「そういうところが真面目だよな」

笑う気配を感じてすぐ隣を見上げると、口元に手を当てて破顔する事業部長の表情が見えてし

まつた。

「つまらない返しかできなくてすみません」

咄嗟に目を逸らして苦笑紛れにドキドキするのを譲魔化すと、エレベーターが部屋の階に止まり、扉がゆっくりと開いていく。

「つまらなくはない。むしろ好感が持てるし、勝俣さんのそういう面は好きだよ」「笑顔のままの事業部長にエスコートされてエレベーターを降りると、あまりにもいつもどきかけ離れた姿に動搖が隠せない。

（こんな無防備な笑顔、破壊力ありすぎるでしょ！）

予想だにしない反応と言葉に動搖するのをなんとか抑え込む。

事業部長が破顔したからって、この人のいつもの態度を思い出せば、かなりリアなアクシデントみたいなものじゃないか。

「まあ、俺に好感が持てると言わわれても迷惑だらうけどね」

「そんなことはないですよ」

「そうか？」

「それはそうですよ。私も事業部長の意外な一面には好感が持てましたし、そういう事業部長は好きですよ」

口にしてから、それでは普段が酷いと言つてしまつたようなものではないかと青ざめるけれど、次の瞬間にそんな考えも吹き飛んでしまう。

「迂闊なことを言うなよ？」

部屋の前に到着すると向かい合うように腰を抱かれ、事業部長の大きな手が私の唇をゆっくりとなぞる。

「あ、の……」

「俺も酒に酔ったみたいだ」

その言葉に答える前にキスで唇を塞がれて、突然のことに目を瞬かせてしまう。

（……どうして？）

パニックになりながらもキスが終わる気配はなく、不意に強まっていく強烈な色香にあてられながら、情熱的になるキスを受け入れてしまう。

そのまま背中を支える手が緩やかに動き、ゾクゾクと甘い痺れが全身を駆け巡る。

ぬるりとした熱い舌が挿し込まれて歯列をなぞられると、ようやくハツとして事業部長の胸元に閉じ込められていた手で突き放してキスを終わらせた。

「嫌だったか？」

耳元に甘い声で囁かれ、はしたなくもお腹の奥がズクンと疼いた。

「や、その……こんな場所ですし」

「なら続きは部屋でしょう」

「えつと……」

「おいで」

優しく添えた手で腰を抱き寄せられると私の部屋を通り過ぎ、事業部長の部屋のドアがゆっくりと開き、エスコートされるまま足を踏み入れた。

背後でドアが閉まる、それが合図みたいに抱き締められてあの香りが一層匂い立つ。

「勝俣さん照れてる?」

「それは……」

「つられそだから、あんまり恥ずかしそうにしないで。俺も緊張はしてる」

ギュッと掴まれた手が事業部長の胸元に当たられ、ドキドキと早鐘を打つような自分のではない鼓動を感じてハツとして顔を上げた。苦笑する美しい顔が私を見下ろしている。

（本当に、ムカつくほどイイ男だな）

普段の事業部長からは考えられないけれど、シンガポールのドラマチックな夜がこの状況を後押しさしたんだろうか。

そんなことを考えているとそのまま顔が近づいて、下唇を食むように捕らえられてキスは段々深くなる。

時折離れてなにか言いたげに開いた唇と甘い視線に見つめられ、キスをはぐらかされてもまた求められると、完全にペースを奪われて、手にしていたクラッチバッグがボトッと音を立てて床に落ちた。

「んっ……んう……」

壁際^{わき}に追い立てられ、逃げ場のない状況で貪るよう^{むさぼる}に淫らなキスを与えられると、どうしてだとか、なんでなんかなんて考へてる余裕がなくなつてくる。

（ああ、私これからこの人に抱かれるんだ）

息をするのもままならないほど優しくて甘いキスに溺れながら、どこか冷静にそんなことを思う。そしてこのアクシデントみたいな事態をどこかで喜んでいる自分に気づく。

吐き出す息ごと呑まれるように口付けは深くなり、肉厚な舌が口の中に入り込んで上顎^{ためら}をなぞられると、はしたないなんて躊躇^{ためら}うことなく、すぐにその舌を追いかけて自分の舌を絡めた。くちゅんと鈍い水音が跳ね、誘われるままに舌を絡めて官能的な挑発に乗り、事業部長の首に腕を回して整つた襟足を緩やかに撫でる。

首筋が弱いのか、事業部長は僅かに体をビクツと震わせながら、私の頸に添えていた手を滑らせて耳朶^{みみたる}を弾き、そのまま指先が耳孔をくすぐり始めた。

「んあっ」

耳なんてなにも感じないはずなのに、触り方なのか、それとも官能的なキスと匂い立つ香りにあてられたのか、鼻から甘つたるい息が漏れる。

「このまま抱いてもいいんだが」

このままとは、立つたままという意味だろうか。

額を合わせ、すぐにでも触れてしまいそうな距離のまま、不埒^{ふらち}な唇が揶揄^{からか}うように呟く。

「ヒールが高いので疲れてきました」

「勝俣さんらしいな」

事業部長はクスッと笑つて啄^{つば}むように唇を奪うと、当たり前みたいに私を抱き上げた。

「や、重いですからツ」

「軽いよ。ちゃんと食べてるのか」

「人一倍食べます！」

「はは、そうか」

食いしん坊な申告をしたところで愛しげな笑顔を向けられ、事業部長に身を預けたままチュツとキスされた瞬間に、この人には敵わないと思い知らされる。

そしてゆっくりとベッドの上に寝かされ、足を酷使したハイヒールを焦らすように脱がされて、足首からふくらはぎを緩やかに撫でる手が膝頭で止まる。

「今更シャワー浴びてから、なんて言うなよ」

「うつ」

「待つてやらないよ」

意地悪く笑つてタキシードを脱ぎ去ると、ついでに靴も脱いだのか、寝そべる私に覆い被さった事業部長の重みでベッドが沈む。

こんなに饒舌な人だつただろうか。不意にそんなことを思うと、上の空かと呟きながら上目遣いに私を見て、デコルテにキスを落とされた。

「んっ」

両手を押さえ付けるように握られて胸元にキスされながら、指の間をしなやかで力強い指が意味深に動くと、ジリジリと追い詰められるように甘い痺れが迫り上ってきた。
甘いキスをしながら事業部長の手が器用にイヤリングとネックレスを外し、髪を解いたところで鎖骨の辺りに熱い息がかかる。

「少し背中上げて」

言われるがまま、背中を弓形に反つたところに逞^{たくま}しい腕が入り込んでくる。

その手がドレスのジッパーを下ろし、首筋のホックが外されると、肩口から腕を引き抜くようドレスを脱がされた。

「こんな色っぽい下着つけてたの？」

「レースだと響かないの」

「なんだ。俺のためかと思つたのに」

「なんですか」

思わずツッコミの声をあげると、屈託のない笑顔の事業部長に見つめられる。
「これでリラックスできただろ」

鼻先を指で弾かれて、そのまま揶揄うように鼻を摘ままれる。
(プライベートだと、こんなに表情豊かな人なんだ)

どうしても今までの印象が強くて、まだ目の前の事業部長がいつも彼なのか懷疑的な気持ちになるけれど、そんな私に構うことなく甘いキスを仕掛けてくる。

「んふつ、うう……、んん」

脳髄まで痺れるようなこんなキスは初めてだ。

優しく舌を搦めとられると、ぐちゅんと内側から厭らしい音が大きく響き、口の中にジワリと唾液が溢れて、どちらのものか分からなくなるほど混ざり合う。

そんなキスに夢中になっていると、事業部長の指がブラの肩紐にかかり、するりとそれが肩から二の腕にずらされる。

支えを失い不安定になつたカップの部分を、遠慮なく下に引き摺り下ろされて乳房がまろび出た。

「随分と着痩せするんだね」

コンプレックスでしかない胸がお気に召したのか、美しい顔が艶やかな笑顔を作り、背中に回つた指先が器用にブラのホックを外す。

ブラに支えられていた乳房がたゆんと重みを増すと、前に回り込んだ事業部長の手のひらが乳房を下から押し上げ、燻る尖端を誘い出すように、乳輪に沿つて指先で円を描く。

「あん」

「感じやすいんだね」

クスッと笑いながら、愛でも囁くみたいに甘いキスをすると、舌を出すよう促されて口の外で舌先が絡み合う。

トロツとした柔く甘い舌が官能的に蠢き、無性にキスを貪りたくなるのに、それを焦らすように舌先だけを執拗に舐られて体の芯が疼いてしまう。

「んあつ」

甘く勃ち上がつた乳首を冷たい指先が捏ねる刺激に声を漏らすと、反対側の乳首を乳房ごとしゃぶられて、ぴちゃぴちゃ跳ねる厭らしい水音に体がゾクリと震える。

「指と舌、どっちが好き？」

「どっちも、ンツ……気持ちいいです」

「ふうん」

面白くなさそうに答えて乳首に歯を立てると、滑つた舌先が執拗に乳首の尖端に押し付けられる。ねつとりと舌を這わせ、乳首を甘噛みして舌先で尖端の凹みを突くように刺激する。

その動きに翻弄されて嬌声を漏らすと、反対側の乳首をぬるぬると濡れた指先が搔く。

「ああっ、んん」

正直なところ今の今まで、胸を弄られても感じることなんてなかつたのに、どうしてなのか彼の舌や指が官能的に動く度に腰が震え、もつと強い刺激が欲しくて体が疼く。

そんな私の変化を知つてか知らでか、事業部長は片手でドレスの裾をたくし上げ、ストッキング越しにショーツのクロツチ部分を擦り上げた。

「もうしつとりしてる」

「言わないで……」

「悪い。でも恥ずかしがるのが可愛くて」

首筋を柔く食むようなキスを受けながら、布越しにカリカリと敏感な部分を搔くもどかしい刺激

を与えられ、早く欲しいと言う代わりに彼の下腹部の膨らみに手をかける。

「そんなに欲しい？」

「だつて……」

「本当に可愛いな」

笑みを浮かべた事業部長はカマーバンドを外し、緩やかに持ち上げた片手で器用にボウタイを解く。その動きはなんとも淫靡で扇情的に私を煽る。

圧倒的な色気にしてられ、思わずゴクリと喉を鳴らして唾液を飲み込む。

事業部長は妖艶に微笑んでシャツのボタンとサスペンダーをゆっくりと外し、露わになつた逞しい体を見せつけるようにシャツを脱ぎ捨てた。

「腰、ちょっと浮かせて」

言いながら私の腰元でクシャツとなつたドレスをもどかしげに引き抜くと、ストッキング越しにショーツのクロッチ部分を指先でカリッと引っ搔いた。

「ああんっ」

「胸よりこっちが好きみたいだね」

イタズラっぽく口角を上げて笑うと、ストッキングごと私のショーツに指を掛け、それをするりと足から引き抜いた。

「陽葉里は随分と肌が白いな」

片足を持ち上げられると、予想だにせずつま先を口に含まれて慌てて足を引っ込めようとも力を込

める。

「やつ、ダメです。シャワーも浴びてないのに……」

「そうだな」

それなのに強めに足を掴まれ、挑発するような目線を向けながら足の指が一本ずつ口に含まれると、どうしたって羞恥心でその場から逃げ出したくなる。

「逃げるな」

「やつ」

唇が足の甲に触れ、唇での愛撫はそのまま足首からふくらはぎへと移動して、フェザータッチの指先が内腿の柔い部分をツーッと撫でる。

「はあ、んっ」

思わず甘つたるい嬌声を漏らすと、事業部長は目線だけを上げて妖艶に笑う。

「こうされると弱いのかな」

試すような強い視線が私を射貫く。

そして無防備な両脚を大きく開かれ、露わになつた秘所に顔を埋めた事業部長は、濡れそぼつた花芽を舐りながら蜜孔に指をあてがい、くちゅくちゅと泡立つ音を鳴らしてクスツと笑う。

「凄いな、糸引いてる」

「やつ、んん」

蜜を纏つた指が焦らすように蜜孔を擦り、鈍く粘ついた水音が疼痛を生み、私を逸らせる。

濡れた指が蜜壺の浅瀬に挿し込まれ、ぐちゅぐちゅと搔き混ぜるように空気が混ざって泡立つ音がして、久しぶりの感覚に隘路の奥がギュッと締まる。

そしてずぶりと奥に挿し込まれた二本の指が、奥で開いて隘路を押し広げると、巧みな指の動きに腰が揺れる。

「あんっ」

「奥に力が入つてないか」

口角を上げた事業部長は親指でコリコリと花芽を虐め、ぐちゅぐちゅと音を響かせながら指を何度も前後させて私を翻弄する。

「あああ……いっ」

「達きそうか。いいぞ、好きなだけ乱れる」

言いながら指を引き抜かれてお腹の奥が切なくなると、彼はまた足の付け根に顔を埋めて蜜に濡れた襞をくぱっと広げ、唇と舌でそこを可愛がり始めた。

「あっ、や……ああ」

硬く膨れた花芽からぱっくりと開いた蜜口を濡れた舌が行き来すると、抗えない快楽が迫り上がり、いつもたやすく限界まで膨らんだ風船が弾け、目の前にチカチカと光が舞う。

「あ、あああっ……うう」

ビクビクと腰を揺らして絶頂する私を満足そうに見つめると、そのまま内腿にキスをして、なんのつもりなのかキツく吸い付いて赤い痕を幾つも刻む。

「陽葉里」

「事業部長……」

「おいおい、やめてくれよ。さすがにそれは萎える」

「でも」

「俺の名前、知ってるだろ」

「……久松さん」

「京哉だ」

熱れて勃ち上がった花芽を甘噛みされ、思わず嬌声を漏らすと、誰に抱かれてるのか覚えておけとハスキーな声が苛立つたように呟く。

「もつと体の隅々まで、分からせてやらないといけないな」

そう呟くとベッドを下り、一体どこに向かうのかと彼を目で追うと、クローゼットの荷物を開けているのかゴソゴソと影が動く。

そして連なった四角いパッケージを手にしてベッドに戻ると、スラックスをボクサー・パンツごと脱ぎ捨てて、怒張した屹立に一つ目の避妊具を纏わせた。

「抱くぞ」

逞しく硬く反り返った淫刀の根元を押さえながら、しどごに濡れた蜜口に鋒をあてがつて、すぐ雁首までをグツと押し込む。

（ああ、この感覚……）

恋愛から遠ざかつて久しく感じなかつた切なさに、思わず隘路に力がこもる。

それを知つてからでか、焦らすように浅瀬を行き来する熱い楔に、焦らして虜められたい気持ち、早く満たしてほしいと逸る気持ちが交錯する。

「凄い唆る顔をしてるな」

「はあ、んつ……」

「いい声だ」

クツレ喉を鳴らして笑うと、硬く熱り立つ淫刀が隘路を押し広げて奥まで突き立てられる。

「あ……んつ」

内臓を押し上げるような強い圧迫感は、欠けた心を満たす気がして、私の顔の横に手をついたままの事業部長の手首に縋る。

抽送に息を乱して喘ぐと彼は少しだけ満足げに微笑み、体を倒して私に覆い被さる。そして正面から私を見つめ、肘をついて私の髪をひと撫ですると、その手で頬に触れてからまるで恋人同士みたいな甘くて深いキスで私を慰める。

「可愛いな、陽葉里」

体を繋いだまま抱き起こされ、正面から向かい合つよう膝の上に乗せられる。

「ああっ」

「奥に当たつて気持ちいい？」

意地悪に笑つて首筋に吸い付くと、私の手を取つて首に巻き付ける。

背中を支えていた手を外した事業部長は後ろ手にベッドに手をつき、腰だけを器用に動かし始めた。

「あああっ」

「気持ちいい？」

ズンズンと下から突き上げられると、グスグズに蕩けた隘路がキュンと締まって、ぶちゅんと鈍い水音が跳ねる。

「やつ……ああ。あつ、あ、凄い、気持ちいいッ」

「素直でいいね。俺もめちゃくちゃ気持ちがいい」

楽しげに笑うと、彼は小さな律動を刻みながら私の左手を掴み、見せつけるように私の指をしゃぶり始めた。

すっぽりと指の根元まで咥えたかと思うと、ねつとり舌を這わせ、たっぷりと唾液を纏わせるようじゅるじゅる音を立てて舐り尽くす。

ふやけて柔らかくなるほど指を舐めると、ようやく口から指を引き抜いて、口角を上げた彼が私を見つめた。

「その指で、自分で弄つてみせて」

「んふつ、んん……」

彼の手に誘われ、下生えを搔き分けて埋もれた花芽に濡れた指先をあてがうと、ほら、という声に従つて自らそれを搔いたり捏ねたりし始める。

「んんっ、はあ……んっ」

彼の怒張した淫刀に貫かれながら、無心になつて花芽を弄ることに没頭すると、言いようのない羞恥と快感が迫り上^{あが}ってきて、意識せずとも隘路を締め付ける。

「上手いじやないか」

不意に優しい笑顔で見つめられてドキッとする、そのまま彼の手が下腹部に下りて私の手に重なつた。

「ほら、手が止まつてる」

「や……ああ、はつ、んんっ」

それまで穏やかだった抽送が速さを増し、下から奥を穿^{うが}たれるのと同時に、彼の手が私を誘導して花芽をグリグリと擦り上げる。

「達きそう？ 奥の締め付けが凄くなつてきた」

最奥に留まつた鋒が子宮をグリグリと押し上げ、今までになかつた快楽が生まれる。

「やああ……それダメツ」

「そんなに気持ちいい？ ほら、手を止めるな」

「あうっ」

前と奥を同時に虐められ、ツラくて逃げ出したいほどの快楽に翻弄されて力が入らなくなる。それなのに事業部長は花芽を弄る手を休ませてはくれない。

「ダメツ、やあああつ……あつ、イクツ、イツちやう」

「達けばいい」

「アアアツ」

声をあげながらガクガクと身を震わせると、満足そうに笑う事業部長が優しくキスをしてくれる。そして緩やかな動きだった淫刀が再び律動を刻み始める、敏感になつた隘路を押し広げるよう肉襞を擦り上げられる。

「やんっ、ダメ、ダメええ」

「凄いよ。うねつて絡み付いてくる」

「ああつ……あんつ、イッてるのに、やあああ」

「気持ちがいいんだろ」

呟いてから触れるだけのキスをすると、事業部長はそのまま仰向けにベッドに倒れ込み、今度は

彼に馬乗りに跨^{またが}つた体勢に変わる。

「さあ、もつと乱れてもらおうか」

腰にあてがわれた手に体を持ち上げられ、少し浮遊したような感覚の後に、ズンツと最奥まで淫刀を穿たれて喘ぎ声が漏れる。

こんなにも気持ちがいいセックスは初めてだ。

もつと淫らに愛してほしくて、余韻の抜けない隘路に力を込める、彼はそれに応えるように抽送を速くする。

みを浮かべ、妖しく舌舐めずりをする。

そして一段と抽送が速くなると、彼の口から艶っぽい息が漏れ、私も抗わず穿たれるまま隘路を締め付けた。

「ん……ああ、気持ちいいよ陽葉里。良すぎてそろそろ達きそうだ」

「京哉さん、あああ、んっ」

「可愛いね」

体を起こし向かい合うように私を抱き締め、キスをしながら激しく腰を打ちつけて隘路を擦り上げる。

「あふっ、ん、んん」

「本当に可愛いな陽葉里……ん、もう、出すぞ」

激しい抽送に奥を締め付けると最奥で彼の熱が爆ぜ^は、硬い芯がぶるりと震え、ドクドクと精を吐き出すのが分かる。

「可愛いよ、陽葉里」

唇が触れそうな距離で熱っぽく囁かれると、皮膜越しとはいえ、熱い精が吐き出されているのを感じて、無意識のうちに奥を締め付けてしまう。

「凄いな。搾り取る気か」

言葉とは裏腹に妖艶な笑みを浮かべると、事業部長はまた私に甘いキスをする。
くちゅりと水音を立てて舌を捌めとられると、脳髄まで蕩けるような快感に、彼の後頭部に手を

回して貪るように唇を求める。

だからまた体が疼くのに時間は掛からなかつた。

二人を繋ぐ楔がざるりと引き抜かれると、喪失感で堪らなくなつて彼を真正面から見つめる。

「そんな可愛い顔でおねだりするんだ?」

「だつて」

「分かってる。もつともっと気持ち良くしてあげるよ」



大きな窓から光が差し込み、朝になつたのだと肌で感じると、まだぼんやりとする意識を起こして目を開ける。

「ん……」

今が何時なのか分からぬ。だけど私を抱き締める腕の確かな感触に、まだ彼の腕の中にいることを実感する。

（ああ、そのまま寝ちゃつたんだ）

数えるのも億劫なくらい体を満たし合つて、それこそ意識を失うまで身を委ねて夜を越した。

だからこんな風に、事業部長の腕に抱かれたまま朝を迎えることになつたんだ。

なんとかして彼を起こさないように腕の中から這い出る。ぐつすりと眠つていてまだ起きる気配

がないことに安堵し、床に散らばった下着とドレスを拾い上げた。

本当は今すぐにでもシャワーを浴びたい。でもそんなことをしてゐる間に事業部長が目を覚ますかもしれない。

寝ている彼の姿を見ていると、昨夜はあるで恋人みたいに扱われたことに困惑するけれど、今はとりあえず物音を立てないように気をつけてドレスを着る。

そして静かにサイドボードに置かれたイヤリングやネットクレスを手に取り、玄関に落としたままのクラッチバッグを拾い上げてハイヒールを履いた。

僅かにベッドが軋む音がして、視線の先のベッドの中で事業部長が動いたような気がしたけれど、

眠っているのならきっとこのままでいい。

(……ゆっくり寝てください)

声をかけずに心の中で呟き、私は事業部長の部屋を後にした。

自室に戻り、抱かれた事実を洗い流すように熱いシャワーを浴びて髪や体を入念に洗う。

ふと気がつくと、体の至る所に昨夜の熱を刻むように赤い痕が残されていて、どうするのが正解だつたのか分からなくなってしまう。

そしてバスボムを入れて爽やかな花の香りが漂う湯船に浸かり、天井を見上げて大きな溜め息を吐き出した。

「はああ」

お酒の勢いもあつたのかも知れぬけれど、事業部長があんな風にいつもと違う顔をするなんて思いもしなかつた。

全てが彼のせいではないけれど、あれだけのイイ男だ。あんな顔で迫られたら、いくら普段意識しない相手といえども、ぐらりと心が揺れるのは仕方ないんじゃないだろうか。

(一回寝ただけなのに、事業部長の顔ばっかり浮かぶとか、チヨロすぎでしょ私)

自分には非がなかつたと言い訳したけれど、拒み切れなかつたのは私自身。私が選んだことなんだ。

「上司と寝るなんて……」

お風呂から上がり、なにをするでもなくベッドに寝転ぶ。消えない自己嫌悪のせいでの食欲が湧かず、朝食の時間も部屋にこもつて過ごすことにして。

だつて事業部長と顔を合わせてしまつたら、どんな会話をしたらいのか分からぬ。朝食を囮んで、昨夜はこれまでになくロマンチックだったなんて、冗談でも言える空気じやない。

(こんなに後悔するなら、なんで寝たのよ)

自分自身に腹が立つて頭を抱え、チエックアウトの時間ギリギリまでベッドでもんどうり打つて時間を過ごすしかなかつた。

(はあ……そろそろ支度しないと)

スマホでセットしておいたアラームを解除すると、必要最低限のメイクをして髪は下ろしたまま

セツトした。

キャリーケースに詰め込んだ荷物を確認して、忘れ物がないかどうか辺りを見回すと、ショルダーバッグにマイクポーチを放り込んで部屋を出る。

幸いにも事業部長はすでに退室しているようで、ホテルのスタッフが清掃に入るところだつた。だけど帰りの飛行機も同じだ。今だけ回避できても意味はない。

一階のロビーに到着すると、いつも通りポーカーフェイスな事業部長がラウンジのソファーで作業している姿が目に入つた。

(そうだよ。あの人はやっぱりあれが普通なんだから)

大きく息を吐いて気持ちを切り替えると、タブレットを使つて作業する事業部長にドキドキしながら声をかける。

「おはようございます。お疲れ様です」

「ああ勝俣さん、随分とゆっくりだつたね。しつかり休めたかな」

「……はい」

当たり前のことに、抑揚のない声が下の名前ではなく苗字を呼んだことに酷くガッカリする。

「どうした。大丈夫なのか」

「すみません、平気です」

「そうか。車は手配しておいた」

「申し訳ありません！ 失念してました」

「いや、構わない。行こうか」

事業部長はいつものように淡々と答えると、タブレットを片付けてソファーから立ち上がつた。相手は私より六つも歳上の大人だ。

(昨夜のことは、やつぱりなかつたことにするんだろうな)

私のことを見ようともしない事業部長の背中を見つめ、言い聞かせるようにそんなことを思う。

タクシーで空港に移動する間も案の定会話はなく、事業部長はいつも通り私なんかには無関心な様子でポーカーフェイスを保つている。

そして帰りの飛行機に乗り込んですぐ隣の事業部長をチラリと見ると、早速タブレットを取り出してまた作業に没頭しているようだつた。

一方私はドッと疲れが押し寄せて、ビジネスクラスのシートで泥のように眠り、直行便で七時間の日本までのフライトを寝て過ごすことになつた。

羽田空港に到着し、預けていた荷物を受け取つて空港から電車に乗り込むと、日曜日だからどううか電車は混雑していた。

「相当疲れてたみたいだな」

まだ意識がぼんやりしている私に、事業部長が何気なく声をかける。

「ただの寝不足なので、大丈夫です」

言つてからしまつたと思つたけれど、案の定気を遣うような言葉をかけられてしまう。

「……悪かつた」

なにがとは言わないけれど、一晩一緒に過ごしたのだから意味は理解できる。寝かせてもらえた
いほど激しく体を満たし合つたのだ。そのことを言つていいのだろう。

だけどあれはあくまでも、シンガポールの夜が私たちをおかしくした想定外のこと。彼を受け入れた私にも責任がある。

「パーティで気を張つてたせいですから、気にしないでください」

だからその話題には触れず、無難な答えを返して笑顔を作る。

私の態度で理解したのか、事業部長はそれ以上のことを語らず、小さくそうかと呟いた。

「火曜も休んで構わないぞ」

「いえ、明日だけで大丈夫です」

本当は明日も休まなくていいかもしない。精神的には確かに少し時間が欲しいけど、事業部長のこの様子なら、多分何日も距離を置かなくても問題ない気がする。

「なら明後日から、またよろしく頼む」

「はい。よろしくお願ひします」

これでいいんだと思う。だから笑顔で返事をすると、無言になるのがしんどくて、週明けのスケジュール確認の話題を振つてその場を繋いだ。

そして乗り換え駅で電車を降りるとキャリーケースを引いて改札を抜け、混雑する場所から少し外れて人の通りが少ない場所に移動する。

「ではここで失礼します」

「……そうか。お疲れ様」

「はい。お疲れ様でした」

なにか言いかけたようだつたけれど、事業部長はいつものポーカーフェイスで片手をあげ、すぐに踵を返してその場を後にした。

その背中を見送りながら、言いようのない気持ちになつたけれど、すぐに気持ちを切り替えて私もその場から移動する。

本当なら電車を乗り継いで帰ればいいのに、駅から出てタクシー乗り場に向かったのは、きっとこれ以上事業部長と一緒にいたくなかったからかもしれない。

自宅の最寄り駅までタクシーに乗り、駅前のスーパーに寄つてお惣菜を適当にカゴに放り込んで寝酒の缶ビールを買うことにした。

飛行機の中でぐっすり眠つたので、今夜はきっと寝つきが悪いだろう。

たつた数日のことなのに、今回の出張ではちよつと色んなことがありすぎた。

（頭と気持ちを整理しないと）

モヤモヤする気持ちを持て余して歩くと、キャリーケースを引く音がやけに大きく響く気がする。気持ちが沈んで、重たい足を引き摺るようにして駅前から十分ほど歩く。乳白色の少しファンタジックな外観のマンションが見えてようやく安堵から気が緩む。

「……ふう。ただいま」

玄関の電気をつけてパンプスを脱ぐと、すぐに洗面所に移動して手を洗つてから雑巾を固く絞る。

そしてキャリーケースのイヤホンを綺麗に拭き、電気をつけたリビングに持ち込んで、ようやく荷解きに取りかかった。

バタバタと洗面所とリビングを往復して洗濯機を回し、ドレスをとりあえずハンガーにかけ、自由時間に購入したお土産を取り出して、自分用に買った紅茶を早速淹れることにした。

「なんか食欲ないなあ」

朝からなにも食べていいのに、鳩尾の辺りがキリキリする。これはもしかしなくとも、ストレスで胃が参ってしまっているんだろうか。

胃をさすりながらリビングのソファーに腰を下ろし、淹れたばかりの紅茶を飲むと、優しいベリーリーの甘い香りがリラックスを誘い、空腹の胃を満たしてくれた。

◇ ◇ ◇

まどろみの中で肌寒さを感じて腕を伸ばしたけれど、そこにいるはずの彼女はもういなかつた。俺はいつから彼女に好意を抱いていたんだろう。酒に酔つたせいにして、そこに邪な火を灯すのは簡単だつた。

戸惑いながらも彼女が俺を受け入れてくれたのが嬉しくて、決して腕の中から逃れられないように抱き潰した自覚もある。

だけど目を覚ましたら彼女の気配はなくなっていた。

「……酒の勢い。そういうことにしたかったのかな」

俺は彼女よりもかなり歳上で、なんの面白みもない男だ。情けなくなつて頭を抱える。

勝俣さんが俺の秘書になつて一年。個人的なやり取りなんて、ほとんど言つていいほど交わしたことことがなかつた。

彼女は仕事に対する真摯で真面目。負けず嫌いの節もあるのか、かなりの努力家でミスを成長のチャンスにきちんと切り替えてくるようなタイプだ。

そんな彼女に触発されて、俺自身も前向きに仕事に取り組むことができる環境なのに、一年も一緒に仕事してきて褒め言葉の一言もかけたことがないなんて。

今回の出張だって、本当なら彼女が付き添う必要はなかつたはずだ。だけど彼女の責任感がパートナーを引き受けさせたんだろう。

「……断れなくさせたのは俺だよな」

酒の酔いに任せたんて悪質なやり口で、触れてみたかつた彼女の唇にキスをした。

酷く驚きながらも、とろんと蕩けた艶やかな表情に歯止めが利かなくなつてしまつた。

（本当……いい歳してなにやつてんだよ）

彼女がいないベッドで目が覚めて、年甲斐もなく動搖した。

シャツを手繕り寄せて彼女の残り香が漂うと、あの蕩けるような時間が、シンガポールが見せた夢じやなかつたことだけは理解できた。

だけど同時に、彼女が望まないことをしてしまつたのだと、反省しても遅いのに後悔が押

し寄せてきた。

「はあ……」

大きく溜め息を吐き出すと、すっかり温くなつたコーヒーを一気に流し込む。

翌日顔を合わせた時も勝俣さんは強張つた笑顔しか見せてはくれなかつたし、その話題に触れることすら拒まっていた気がした。

女々しい溜め息を吐きながら頭を抱えると、テーブルに置いてあるスマホが着信で震える。

「非通知って、またか」

画面を見るなりげんなりした溜め息が出る。このひと月ほど、非通知での着信が時折かかつてくる。仕事上の相手なら非通知で電話がかかつてくることはまずないし、おそらくどこかで番号が漏れたのだろう。

非通知での着信も、最初の頃は疑うでもなく電話に出たこともあつたが、無言電話で相手の声は一切聞こえない。だからそのうち気味が悪くて放置するようになつた。

「どこの誰なんだよ……」

気味の悪いことといえば、最近誰かに見られているような感じがする時がある。

それで神経が張り詰めて滅入つていていたせいもあるのか、本来なら一線引くところだつたのに、海外出張という非現実的な時間が感覚を麻痺させたのか、勝俣さんに手を出してしまつた。

「ダメだ。これじゃ堂々巡りだ」

ソファーから立ち上がりつてキッチンに移動し、ウイスキーを開けてハイボールを作る。シラフじやかつた。

いられない氣がするからだ。

その間にもまたスマホが鳴つているみたいだが、どうせまた非通知のイタズラ電話だろう。

適当にツマミを見繕つてリビングのソファーに戻ると、案の定かかつてきた電話は非通知で、着信が途絶えたのを確認してすぐに非通知の電話を着信拒否に設定した。

なにを見るでもなくテレビをつけ、勝俣さんとの間にあつたことをどうするべきなのか、このままうやむやにしていいのか考える。

責任ある大人として、酒の勢いということにして、なかつたことに対するのはどうかと思う反面、彼女のあの態度を見るに、向こうはそういうことにしたいのかもしれないと弱気になつてしまふ。

（好きだって、きちんと伝えるべきだつたのかな）

火遊びのつもりだった訳じゃない。だけど彼女を目の前にしたら怖気付いてなにも言い出せなかつた。

「俺つてこんなにウジウジした性格なんだな」

思わず情けない言葉が口から漏れる。

勝俣さんの連絡先なら知っている。スマホを手に取つてメッセージアプリを開き、彼女に連絡しようとして指が彷徨う。

ただの上司と部下でしかないはずの相手に、あの夜のことがあつたからといって、馴れ馴れしくメッセージを送るのはおかしいだろうか。

これまで個人的なやり取りが一切なかつた画面を見つめて女々しく悩んでいると、新しくメッ

セージが届いた。

送り主は叔父で、電話をしても構わないと端的な文面に、またあの話かとあたりをつけて少し
げんなりする。

「どうせあの話だろうな」

嘆息して大丈夫ですとメッセージを返すと、すぐに電話がかかってきた。

「はいもしもし」

『悪いな突然』

「大丈夫ですよ。どうかしましたか」

『分かつてゐるんだよ。見合いの話だよ』

『叔父さん、俺にはそんな気ないですって言いましたよね』

『でもな京哉、お前ももういい歳だろ』

呆れた様子に、溜め息を吐きたいのは俺の方だと頭を抱える。叔父からの連絡は最近ずっとこの調子だ。

「叔父さんが気にかけてくれてるのは分かつてます」

『なら、少し会つてみるだけでもどうなんだ』

『会つたところで進展させる気がないんですから、先方に手間をかけるだけですよ』

『会つてみれば意識が変わるかもしれないだろ。なにが不服なんだ』

『……お断りするのに、好意を持たれても迷惑だからですよ』

『会わなければ分からぬじやないか。そうやつていつまでのらりくらり過ごすつもりだ』
「俺にも俺の事情があるんです。心配してくれる気持ちはありがたいですが、せつつくようにされると余計に嫌になるんですよ」

まるで思春期真っ只中のガキの反抗だなど思いながらも、それが事実だから分かつてもらうほか
ない。

確かに甥っ子が三十四にもなつて独り身なのが心配なのは分かるが、気にすることはもつと他に
あるだろう。

俺の置かれている立場が叔父を心配性にさせているのも充分理解できる。でもそんな世話をして
ほしいと頼んだことは一度もない。

『お前も大人だ。確かに結婚だなんだと周りから干渉されるのは居心地も悪いだろ。だがな京哉、
こちらのことも真剣に考えてくれんと困るんだよ』

『それは分かつてます』
『それを信じてるから、心配してゐるんだ』
『それも分かつてます』

スピーカー越しに溜め息が聞こえて耳が痛い。叔父の発言が興味本位でないことくらい分かつて
いる。だからこそモヤモヤした気持ちが広がつて嫌になる。

俺の反応で今回は諦めたのか、持ち上がりつてゐる見合い話は断つておくと引いてくれたが、それ
もいつまで通用するのか分からない。

『また連絡する』

「あの、叔父さん。見合いの話はもう……」

『お前にその気がないのは分かってるよ』

「本当に申し訳ないんですが、お話をお受けする気がないのに、今までみたいに話を持ち込まれても先方にご迷惑になりますから」

『……今はそういうことにしといてやる。だけどいつまでも好きにできる訳じやないんだぞ』

「分かってます」

『その言葉、信じてるからな』

念を押すような声に冗談は混じっていない。

親父が亡くなつてから世話になりっぱなしの叔父に頭が上がらないのは事実だが、この話題だけは勘弁してほしい。

酷く疲れて電話を終えると、ソファーに倒れ込むように寝そべる。

「信じてるならそつとしといてくれよ……」

一番手っ取り早いのは、恋人を作ることだと分かっている。そう考えて勝保さんとのことを思い出し、ますます痛む頭を抱えるしかなかった。



代休が明けた火曜日。

出勤するまでは変に緊張して胃が痛かつたけど、デスクに座つてモニターに向かい淡淡と仕事する事業部長を見ると、やはりあの夜のことは忘れてしまつた方がいいと思えた。

「陽葉里おはよう。出張お疲れ」

同期で企画部の酒田瑞貴に声をかけられ、ふと我に返る。

「おはよう。あ、ちゃんと瑞貴用にお土産買つてあるよ」

「やつた」

お土産を手渡して瑞貴との会話を切り上げると、就業前に各部署にお土産のお菓子を配る。そこでタイミングよく出勤してきた営業の峯村課長と出会した。

「やあ勝保さん。お疲れ様」

「お疲れ様です。お口汚しだけど、良かつたら峯村課長も召し上がってください」

峯村課長といえば社内では有名なイケメンで、独身の三十歳。

気さくで愛想が良く、明るめの色の髪は短くカットされ、精悍な顔立ちなのに甘さが際立つ垂れ目がちな目元。その目元のほくろが、母性本能をくすぐるチャームポイントだと騒ぐ女性社員も少くない。

それに加えて兄弟姉妹に囲まれて育つたというだけあって、気配りが細やかで後輩への面倒見もいいとくれば、女性社員に限らず人気があるのも納得だろう。

だからなのか、峯村課長と話していると、お土産を渡しているだけなのに周りの女性社員からジロジロと不羨^{ふしが}な視線を向けられる。

「ああ、そつか。シンガポール出張お疲れ様。楽しんでこれた?」

「楽しむだなんて。失敗しないように、緊張しつぱなしでした」

「あはは。勝俣さんが失敗なんてしないでしょ」

「いえいえ。事業部長のサポートでしたから。私だって気を遣いますよ」

「だろうね」

峯村課長は苦笑すると、一つもうねと焼き菓子のパッケージを手に取つてデスクに向かつた。
(だろうねって、ちょっと失礼じゃない?)

事業部長は確かに堅物で塩対応だけど、峯村課長みたいに四方八方にいい顔をしてヘラヘラしてるのは、比べ物にならないと思う。
自分を貶められた訳でもないのにモヤモヤして複雑な気分になるけれど、視界の先で淡々と仕事をしている事業部長が見えてハッとする。

そうだ。私だってあんなことがなければ、きっと事業部長に対する見方は同じだつたはずだ。
(どうかしてるのは私の方か……)

急に我に返つてしまふと、デスクに戻り、パソコンを立ち上げてからメールチェックに行くことになつた。

取りかかつた。

午前の仕事を終えて昼休憩になると、瑞貴がランチに誘いに来て一人で馴染みのお蕎麦屋さんに行くことになつた。

会社を出て裏手に回り込むと、世間話をしながら店を目指して歩く。

「それよりどうだつたの? シンガポールの話聞かせてよ」

「そうだね。凄く豪華な部屋だつた。パーティーの前にかなり自由時間もあつたし、ガチガチの出張つて感じじゃなくて楽しめたよ」

「アストラエアはラグジュアリー路線だもんね。泊まれたの羨ましいな。あ、そういうえば結局どんなドレス着たの? 写真とかないの」

「まさか、写真は撮つてないよ。あ、報告書まとめないとけないんだつた」

「なにそれ。パーティーの感想つてこと?」

「違う違う。ホテルを利用した感想」

「ああね」

ランチタイムで混雑した店に入ると、店の中の椅子に座つて案内の順番を待つ。

「それでもさ、事業部長も太つ腹だよね」

「なに、突然」

瑞貴の言葉の意味が分からず、思わず顔を顰める。

「ドレスのことよ」

「ドレス？ ああね。今時は会社のパーティーに参加するからって、イヤリングとかネックレスまで経費で落とせるんだね」

「……ちょっと陽葉里、あんたまさかそれ本気で言つてるの」「なにが？」

「キヨトンとした顔してんじやないわよ。そんなの事業部長のポケットマネーに決まつてるじゃない」

「嘘！ アレ事業部長の自腹なの!?」

思わず大きな声が出てハツとすると、ちょうど席の案内に来た店員さんに声をかけられ、瑞貴との会話が一旦途切れた。

(え……、まさか個人的に買ってくれたってこと?)

確かに違和感はあつたけれど、なんでそんな当たり前のことに対する考えが及ばなかつたんだろう。そもそも注文を済ませる瑞貴に急かされて山菜うどんを注文し、あんな物が経費で落ちる訳がないだろうと呆れた顔を向けられる。

「そんなの常識で考えてあり得ないでしょ」

「だつて……え、どうしよう」

「どうしようつて。ちゃんと改めてお礼でもすれば?」

お礼と言わなくても、あんなハイブランドの商品をまさか事業部長が自腹で購入したなんて、どう

お礼すればいいのか見当もつかない。

青ざめる私を見て瑞貴は溜め息を吐き出ると、一緒にお礼のギフトを見に行こうかと助け舟をしてくれる。

「今日の帰りでも見に行く？ でもまあ、あの事業部長のことだから素直に受け取ってくれないかもしれないけどね」

「ヤバい。瑞貴、どうしよう」

「やばいね。だいたい陽葉里は仕事はできても抜けてるところがあるよね。冷静に考えたら分かりそうなものでしょ、普通」

「そうだよね。本当にどうかしてた」

「そうだ。少し考えれば分かることなのに。」

ただでさえ、あの夜のことがあつて微妙な状況なのに、ドレスやハイヒールにバッグ、イヤリングにネックレスまで、会計が事業部長持ちだったなんて気まずすぎる。

それから瑞貴が話題を変えて、テーブルに運ばれたうどんを食べつつも、味も分からぬまま心ここに在らずな状態でランチタイムを終え、この世の終わりのような気持ちで会社に戻った。

「とりあえず、仕事終わったら付き合ふからさ」

「うん。ありがとう」

「本当に、しつかりしなさいよね」

ボンと肩を叩かれて苦笑されると、私も力なく笑うしかなかった。